

私と教祖

「おふでさきの勤写を通して」

お道に入信以来、六十余年、朝夕のおつとめに自分なりに赤衣を御召になり、茶筌に髪を結われた教祖のお姿を心に描きお慕い申し上げておりますが、本や時報等にて、教祖にお声を掛けて頂いた、又、赤衣を召された教祖を拝したという話を聞いたり、読ませて頂いた時、自分は不徳者やと思っていました。修養科一期講師を勤めさせて頂いた時、同期の先生から、涙ながら聞かせて頂いた時は、本当に羨ましく思いました。そんな私にもより身近く教祖に近づける旬をお与え頂きました。一昨年十月、五十五年間道一筋に歩んだ家内の出直しという大節を頂きました。私にとつては、晴天の霹靂、十一月におちば豊田山荘に、納骨後、三ヶ月は毎日が精神的空虚と日に何度も襲つてくる寂寥感と共に何事も積極的にやる気なく落ち込んでいた私に、大教会より、たすけ綱を下ろして頂きました。来年十一月に執り行われる此花大教会創立百二十周年に向つての歩みの中で、部内全教会がおふでさきを勤写、それを記念祭当日、教祖の御前にお供えをさせて頂くと発表されました。生来の悪筆、そして心の浮かない私でしたが、会長様を通して、信者一同に声を掛けて頂いたところ、十三名（内英語四名）の方が賛同して下さいました。又、複数の方が二回筆写して下さいました。勇み立つ信者さんの姿に悪筆は教祖が見通して下さいっていると心を鞭打ち、私も勤写に懸からせて頂きました。一号―二号と勤写している内、

ふと気付きました。あれほどの寂寥感が随分軽快していることに気付きました。お姿、お声に接することのない中にも、おふでさきの中に籠る教祖のたすけてやりたい親心を悟らせて頂きました。

いかほどにせつない事がありてもな

をやがふんばるしよちしていよ 十五号八

月日にハセかいぢううハみなハが子

かはいしばいをもていれども 十七号六十八

教祖有難うございました。成人の鈍い私、心より反省お詫び申し上げます。

このはなしなんともふてきいている
てんび火のあめうみわつなみや 六号百十六

昭和二十年七月九日、当時学徒動員にて堺の軍需工場に勤めていた時、堺市が一面焼野原になりました。又、翌年一月南海大地震より故郷故郷三尾にて、津波を体験致しました。教祖の仰せられることには、千に一つも違いないと実感致しました。

長く拙い文書ですが、私の実感を赤裸々に綴らせて頂きました。有難うございます。

西賢一 八十五 カナダ 此花大教会